

松尾英明

◆ Matsuo Hideaki

主体性を伸ばすための47の対話

不親切教師は かく語りき

賛否両論。

よけいな親切をしないことこそが、子どもたちを主体的にし、自らの力を発揮できる環境をつくる真の親切であり、本当の愛情である——そう語った不親切教師に寄せられた疑問・質問・意見・批判。それらの問いに丁寧に答えつつ語る具体的で実践的な教育理念。

教育界を揺るがした
ベストセラー
待望の
対話編

★ さくら社



不親切教師は かく語りき

主体性を伸ばすための47の対話

◎はじめに

学校教育とは本来、その国の社会の未来を形作る柱であり、希望そのものです。

しかし今、日本の教育現場には、見過ごされがちな課題が山積しています。その一つに、一見すると良かれと思われる慣習や価値観が、実は子どもたちの可能性を制限していることがあります。それはまた、教師自身の成長をも妨げる要因となっているのです。

教育現場に立つ教師は、日々迷いや葛藤の中で奮闘しています。

子どもたちの多様な個性や価値観、保護者との関係性、そして学校全体の調和を図りながらも一人ひとりの個性を尊重する。そのバランスを保つことは簡単なことではありません。しかし、教育の目的とは、こうした日々の困難を乗り越えてでも向かうに値するものです。

教師の仕事が目の前忙しさに埋もれがちな今だからこそ、私たちはあらためて問い直す必要があります。そもそも、私たちは何のために教室に立っているのでしょうか。

教育は、誰かに言われた通り行動することではなく、自ら考え、選び、行動する力を育てる営みです。そのために教師は、子どもたちに知識を授けるだけではなく、自らの人生を切り拓いていく力の根っことなる部分を育てなければならない——そう考えるとき、大切な一つの軸が浮かび上がります。

それが、「主体性の向上」です。

このような考えのもとに生まれたのが、前著『不親切教師のススメ』です。

余計な親切をしないことこそが、子どもたちが主体的に行動し、自らの力を発揮できる環境をつくる真の親切であり、本当の愛情である——そう考えて記した一冊でした。

するとありがたいことに、テレビやインターネットメディアも含めた、様々な場から予想を超える多くの反響をいただきました。さらに教育関係者だけでなく、保護者や子どもたち、そして異業種の方々からも数多くのご意見やご感想をいただきました。

その中で浮かび上がってきたのが、「その理屈で、教育は成立するのか？」という問いでした。

そうした問いに応えつつ対話を重ねる中で、「不親切こそ親切」という理念をより具体的な実践として提示する必要があると感じるに至りました。

かつての教育には、「こうあるべきだ」という絶対的な価値観が確かに存在していました。教師は聖職者と呼ばれ、その言葉やふるまいは正しさの象徴とされていたのです。

しかし現代の教室には、もはやそのような一枚岩の正しさは通用しません。

100年以上もの昔、哲学者ニーチェが「神は死んだ」と語ったのと同様、現代の教育の世界でも、かつて信じられていた正解や権威は、すっかりその力を失いつつあります。今や、かろうじて形だけ

が残り、その中身や意味が鋭く問われている時代だと言えるでしょう。

では、その空白をどう埋めるのか。現代の教師に必要なのは、誰かにすがり信じるのではなく、自ら問い、意味を創り出す姿勢です。

自らの人生を切り拓く「主体性」とは、内から湧き上がる「もつとよくありたい」という願い、すなわち「力への意志」によって育つものです。これは、子どもだけに求められるものではありません。教師にもまた、同じ意志が求められます。現状に甘えず、形式的な優しさに逃げず、自らの行為を日々問い直しながら更新していく意志。その意志をもち続けることが、やがて子どもたちの学びの質も変えていくはずです。そうした姿こそ、教育活動の本質ではないでしょうか。

では、私たちは現実の教室で、何をどこまでするべきなのでしょう。

教育においては「必要なことを行い、余計なことを手放す」を常に心がける必要があります。なぜならば、時間は有限だからです。これは日々の実践の基本でもあります。

そのとき教師が心がけるべきことは、子どもたちを無理に型にはめることではありません。必要なのは、子ども自身が生来もつ力を信じ、見守ること。そのためには、教師自身が自らの実践を省みつ、主体的な判断を下すことを心がけ、続けなければなりません。

本書では、そうした教師に求められる具体的な姿勢や技術を具体的に示し、子どもたちだけでなく教師自身も成長するための道筋を描きました。

また、教育は教師だけの営みではありません。保護者や地域社会、そして子どもたち自身も含め、全員が学び合い成長する過程であるべきです。本書が、教師だけでなく保護者や教育に関わるすべての方々にとって、「不親切こそ親切」という視点で、子どもたちの可能性を最大限に引き出す方法を模索するきっかけとなることを願っています。

教育の仕事は、時に困難に満ちているかのように思われるかもしれませんが。しかしその分、大きな喜びや達成感を伴う仕事でもあります。教師として働くことの役割がいかに尊く価値の高いものであるか、本書を通じて改めて感じていただければ幸いです。

著者 松尾英明

第二章

無理解に気付く……………11

- ① 親切教師は「熱心な無理解者」……………14
- ② 「先生の話は聞くもの」か……………17
- ③ 「みんななかよく」できない前提がある……………21
- ④ 指導の成果ではなく発達の結果……………25
- ⑤ 教師は安全基地ではない……………28
- ⑥ 「おもしろ」が多い理由……………31
- ⑦ 暴力や暴言の陰にある「助けて」の声……………34
- ⑧ マラソン大会という無理解……………38
- ⑨ 教師は「許さない」ができない……………41
- ⑩ 背の順は多様性の尊重と逆行……………44

バランスをとる……………47

- ① 「みんなでドッジボール」という人権感覚の鈍さ……………50
- ② 礼儀は人間関係の潤滑油……………53
- ③ 「揃える」から「スタンダード」へ……………57
- ④ 服装規定というルール……………60
- ⑤ 「指導」と「支援」……………65
- ⑥ 「強制」と「選択」……………69
- ⑦ マスク着脱を「強制」できるか……………72
- ⑧ 「多様性を認める」とは……………76
- ⑨ ルール設定は適切な評価とセットで……………81
- ⑩ 「積極的不行動」と「消極的不行動」を見極める……………85

第三章

「そこじゃない」……89

① 「きちんと」を求めすぎていないか……92

② 「夏休みのしおり」による管理……95

③ 正解は「どちらか一方」か……98

④ 「我慢」の美德をはき違えない……101

⑤ 親切が「不正行為」になるとき……105

⑥ 「例年通り」は消化行事……107

⑦ 体育がつくる「運動嫌い」……110

⑧ 「栄養バランス」「三角食べ」より大切な食育……114

第四章

不親切教師的「切り返し」の技術「習得」のススメ……117

① 親切が学びの妨げになる……120

第五章

心配を手放す……………143

- ② 不親切が引き出す子どもの優しさ……………122
- ③ 「同じこと」の中でこそ育まれる個性……………124
- ④ 働き方改革に実効を……………126
- ⑤ 「難問」で挑戦意欲を引き出す……………129
- ⑥ 連絡帳は返事一文&すぐ電話……………131
- ⑦ 保護者の努力は全肯定……………134
- ⑧ 宿題を出す目的……………137
- ⑨ 失敗を歓迎しよう……………140
- ① 「教科書を終わらせる」は目的じゃない……………146
- ② 枠の中での自由……………149

- ③ ドリルを丁寧に見るよりこまめな小テストで…… 152
- ④ 学校で起きたことは学校で…… 155
- ⑤ 説明はシンプルなほどよく伝わる…… 158
- ⑥ 心配事はパス（手渡し）しよう…… 161
- ⑦ 心配を取り除くための先回り…… 164
- ⑧ 「全員に平等に」という思い込み…… 167
- ⑨ 「全員に同じ成果を」という義務感…… 170
- ⑩ 保護者からの要望対応に線引きを…… 173

第一章

無理解に気付く

教育現場において、教師としての最大の課題は、子どもたちを深く理解することです。しかし、「自分は理解している」という思い込みが、実は最大の妨げになり得ることに気付いているでしょうか。

教師がもつ知識や経験に裏付けられた自信。それ自体は尊いものです。ですがその自信が、時に子どもの本当の気持ちや状況を見落とさせることがあります。この「無理解」を認めること、つまり「無知の知」をもつことこそが、教育の根本を支える土台となるべきです。

例えば、この章で紹介する、児童精神科医・佐々木正美氏（故人）の提唱した「熱心な無理解者」という視点。これは、どんなに教師が熱意をもって親切に接しても、子どもへの深い理解が欠けている場合、その努力が逆効果になるという警鐘です。

「子どもは教師の話を聞くもの」という前提を捨て、子ども自身が主体的に動き出すきっかけをつかむためには、まずは教師が自分の無理解に気付く必要があります。

子どもの行動や問題を安易に「指導の成果」と捉えず、それが発達の一環であるかどうかを見極める視点は重要です。おもしろや暴力行為の裏には、心理的な要因や助けを求める声が隠れている場

合があります。それを見逃さずに捉えることができれば、子どもたちは安心して自分を表現できる環境を手にします。マラソン大会で苦しむ子どもが存在することや、背の順は当たり前という固定観念に違和感を抱くこともまた、教師自身の無理解に気付くきっかけとなるはずです。

ここで重要なのは、介入の仕方です。感情的かつ親切に介入するのではなく、合理的かつ不親切な対応を選ぶ方が、子どもの本質に寄り添えることもあるのです。

本章では、「見えていないことに気付くこと」をテーマの中心に据えています。「無理解に気付く」重要性を数々の具体例とともに探りました。教育者が、子どもの行動や言動の奥に潜む背景を見つめるための第一歩は、現状をすべて把握することではありません。それよりも、「教師の目や耳には限界がある」という事実を認め、その上で周囲と協力しながら支援の形を模索する姿勢が必要です。見えていないことを認めることで、子どもたちの本当の声に耳を傾ける力が育まれます。それこそが、教育の本質に近づくカギとなるのです。

不親切というのは単に愛情不足なのではありませんか？

私は子どもを心から思う気持ちから、親切を心がけています。

親切教師は「熱心な無理解者」

学級には、多様な子どもがいます。一口に多様と言いますが、その実態はまさに千差万別です。『教室マルトリートメント』の著者である川上康則氏の言を借りると、子どもはみんな「こんぺいとう」だそうです。こんぺいとうは、トゲトゲの部分があるからこそ、こんぺいとう足り得ます。それを削り取って丸くしようという発想は誤りなのだそうです。

子どもはそれぞれ、凹凸のポイントが全く違います。親切な教師は、凹んでいる部分をあの手この手で埋めようとします。あるいは、凸部の方を削り取って何とか丸くしようとします。凹凸が、気になって仕方がないのです。熱心に、何度でも、あきらめずに繰り返し返します。それが子どものためという強い信念があるからです。そこには善意しかありません。疑問が入り込む余地也没有ありません。

善意で行われることが実は誤っている時ほど厄介なものはありません。誤ったことをしているとい

う自覚があればどこかでやめるのですが、行為者に自覚がなければその歯止めが利きません。そして、その行為が良いか悪いかを決めるのは、行為者ではなく、受け手の側なのです。

残念なことに「親切な教師」であるほど「熱心な無理解者」（児童精神科医・佐々木正美氏の提唱）になりやすいのです。相手はそれを欲していないのに、熱心に勧めてきます。しかも、あの手この手で、しつこく何度も。そこには「かわいそうなあの子を救ってあげよう」という善意しかありません。相手は本気で嫌がっているのに、そうは思えないのです。窮地にいる相手を自分こそが救ってあげようという救世主的善意です。

これは非常に厄介です。善意で押してくる側が、自分の生活に近いほど性質が悪くなります。子どもにとってその最強の存在はもちろん親で、教師はそれに次ぐくらいの立場の強さです。

落ち着きがなく席に着けない子どもがいるとしたら、何とか席に着かせようとしています。普通に言ってもきかないので叱責が段々強くなります。言葉ではきかないので、物理的に押さえつけるようになります。椅子に無理矢理座らせても嫌がって暴れるので、他の大人を付けるなどしますが、ますますひどくなっていき、やがて教師の側か子どもの側のどちらかが力尽きます。即ち「無気力」の段階へ移行するのです。結局、本質的な目的を考えれば両方が「負け」であり、勝者なき無益な闘いです。

これら誤った行動はすべて、元々が親切だからです。相手に無関心であればそんなことはしません。教師は、子どもに無関心ではいられません。しかし「片目を瞑る」ことならできます。凹んでいる部分、あるいは凸部についてはとりあえず見ないという方法です。

凹みを気にして埋める、あるいは凸の部分を削ろうという行為は、凹凸のあるものを丸くしようという行為です。つまりは多様性への否定であり、「あなたがあなたであることを認めない」という存在の否定です。「普通」「みんなと同じ」が善という、工業製品づくりの発想です。

逆でいいのです。凹みは凹み、凸は凸として認めます。「認」という漢字は「言を忍ぶ」と書きます。自分にとっては気に入らないことだとしても、余計なことを言わずに忍ぶことです。ために「動き回る子ども」に対し、制止する方向での関与をしないことにしてみます。むしろ先手をとって、動くことを推奨します。「トイレに行ってきたら?」「水飲みたいんじゃない?」などと声を掛けるのもいいです。「○○を取ってきて」などと頼るのもいいです。また、認めるとは「見てとめる」ということでもあります。凹んだ部分よりも凸の部分を強く認識し、相手にその素晴らしさを伝えることです。「いつも○○してくれてありがとう。頼りになるよ」などと声を掛けるのです。

凹んだ部分に囚われて、熱心な無理解者にならないこと。真の理解者として、凸の部分をこそ認めて伝えること。それこそが、不親切教師の目指す本当の親切であり、愛情です。